





















































名称	説明	只見	奥三面	羽村	沼津	徳山	滋賀	鹿児島	沖縄	さまざまな呼称	備考	
農耕用具 河野通明												
耕起・代掻き												
鍬と鋤	人力の土掘り具のうち、刃に対して柄がL字形に直角から鋭角に取りつけられたものを鍬と呼び、振り下ろして土を掘り、引き寄せて土寄せ・除草・畦塗りなどに使う。これに対して刃と柄直線上かやや鈍角につけられたものを鋤と呼び、シャベル・スコップに相当するもので、溝掘りや土を掘ってはね捨てるのに使った。											
 くわ鍬	鍬には、「風呂」と呼ぶ柄つきの木製鍬平に鉄製の鍬先をはめ込む風呂鍬と、ヒツと呼ばれる四角い鉄製ソケットに柄を挿し込むヒツ鍬の2系統があった。風呂鍬は古代から使われた鍬なのに対して、ヒツ鍬は江戸時代に中国から伝わったもので、厚手で細身の鍬先のついた開墾用の「唐鍬」、鍬先が3本4本に分かれた備中鍬がある。昭和に入ると四角い鍬平に柄を挿し込んだ「金鍬」が風呂鍬に代わって普及し、現在ホームセンターで売られている家庭菜園用の鍬も金鍬である。	クワ	クワ	クワ	クワ	クワ	クワ	クワ	クワ	クワ	【鍬】かだいから・かんがら・かんだい・くわがら・くわがら・くわでやがしら・くわんだい・こいち・さくりくわ・さくりつか・しほり・とうちもん・ほい・ほがい・ぼち・ぼちくわ・ふあーい・ペー・モーザス・もった 以上、『標準語引き方辞典』（佐藤亮一） 【鍬】かんがら・こいち・こいち・とちもん・ぼい・ほがい・ほびろ・ペー・こまがで・てんが 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）	
 ふるぐわ風呂鍬	「風呂」と呼ぶ柄つきの木製鍬平に鉄製の鍬先をはめ込んだ鍬で、古代以来の伝統的な鍬。中世までは刃先が丸い丸先鍬で全体が地金製だったが、戦国時代末期に刃金をつけた角先鍬が開発され、それが江戸時代に農具に普及した。刃金がついたことで、年1回鍛冶屋に出して減った刃を補修する先掛けが習慣となり、柄は櫛木屋・棒屋と呼ぶ木工職人が製作した。	クワ、ヒラ	クワ、ヒラ	クワ、ヒラ	クワ	クワ	クワ	クワ	クワ	クワ	オデグワ、ミンゲ カナグワ、マーグ ア、タウチ クワ、ヒキ クワ、イタ クワ	
 くろくわ黒鍬	戦国大名の工兵隊「黒鍬組」が使っていた土用の鍬の後裔で、柄の長さはやや短めの90cm台だが風呂鍬と刃先は大振りで「大鍬」とも呼ばれる。一般農民も大名から土木工事に動員されたので、土木工用の大鍬を常備したが、土木役が金納に変わり、さらに唐鍬や備中鍬の出現で使用場面が減り、鍬平が大きいため畦塗りによく使ったという。											
 びっちゅうぐわ備中鍬	2本から4本の刃（歯）を持つ鉄製の鍛鍬で、関東ではマンノウ（万能）とも呼ばれている。柄を挿し込むヒツをもつことから中国伝来と考えられ、備中鍬は国内での主産地の名称であろう。江戸時代中期以降に出現し、深耕用の鍬として広く用いられた。	サンボング	タブチクマ	マンガア	マンノウ、サンボノウ	マンノウ	ヨツグワ、ミツグワ	フタツグワ、ミツグワ	フタツグワ、ミツグワ	フタツグワ、ミツグワ	フタツグワ、ミツグワ	【三つ爪の鍬】あひ・かぎくわ・くまで・くまんくわ・くまんが・こまざら・こまざらい・こまざらえ・さんぼんあし・さんぼんくわ・さんぼんこ・さんぼんすめ・さんぼんまんが・たくわ・まぐわ・まぐわ・まのくわ・まのくわ・まんが・まんのー・まんのーくわ・まんの・まんのが・みつこまで・みつこ・みつこくわ・みつこ・みつんが 以上、『標準語引き方辞典』（佐藤亮一） 【備中鍬】くまで・みつこ 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）
 とうぐわ唐鍬	鉄製の細くて肉厚の鍬平に柄を挿し込む方形のヒツを備えた開墾鍬で、江戸時代前期に中国から伝来。開墾・切株起こし・植林・焼畑の整地・土木工事にも用いた。	トウグワ	トウグワ		トウグワ、トウグワ	トウグワ、トウグワ	トウグワ、トウグワ	トウグワ、トウグワ	トウグワ、トウグワ	トウグワ、トウグワ	トウグワ、トウグワ	【唐鍬】がじ・かぶきり・かぶきりとんが・かみしも・かみしもくわ・さがら・じんくわ・ひらとー 以上、『標準語引き方辞典』（佐藤亮一） 【唐鍬】がじ・かぶきり・さがら・ぼち 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）
 てぐわ手鍬	しゃがんで使う柄の短い小形の鍬で、焼畑や傾斜地の畑などの作業、芋類の収穫、種芋植えなどに使う。	ヤマグワ	(会津)				チョツコイ、コ、コチヨ、ビ	テグワ				【小さい鍬】ちよんが・ちよんがら・ちよんちよん・ちよんちよんくわ・ちよんなんが 以上、『標準語引き方辞典』（佐藤亮一） 【手鍬】てが 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）
 ふぐし	根菜類の収穫などに用いる小形の直棒状の農具で、T字形把手の柄に鉄刃をつけたもののほか、さまざまな形態がある。				ツクイボ	クサヌキ、タケベラ、ツムシ、ハシラ	アナツキボ、ウ、マメサ、チボウ	フグセ、ツクイボ	クン(アサ)	ティフク、グーシ		【土に穴をあける串】くじり・ちーさび・つっくしほー・とくし・ふぐし・ほそ・つくほー 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）
 へら	くの字に曲がった短い柄にへら状の細長い鉄刃をつけた農具で、奄美大島から沖縄県にかけて使われる。柄を握って刃が地面を擦るように向こうに押し使ひ、除草やサツマイモ掘りをした。ピラ、フィラなどと呼ばれる。また先の尖った種類はタイと呼ばれる。							x	へら、フィラ、ピラ	ヒーラ		
 ほりぼう掘棒	山芋は地下に垂直に伸びて1mを超すが、その山芋を傷つけないで掘る専用農具で、南九州で広く使われる。長さ20cmほどのへら状の鉄刃に長い柄をつけて全長150〜200cm前後で、山芋に沿っていねいに掘り下げていく。地域呼称はキンツキ(金突)、キンツ。			ケレン			ヤマイモホ、ホリカギリ	ホリボウ	ホリボウ	(キンツ、タ、イモホリボウ)		
 かぶきりぐわ株切り鍬	稲刈りの後の稲株を切り割る専用の鍬で、ヒツをもつ金鍬の刃を菱形に広げたもの。稲株を早く腐らせて土になじませるのがねらいで、また犁耕の際の抵抗をへらす効果もあった。				カブキリ				カッキイ			
 かぶきり株切り	稲の刈株を足で踏んで切り割るもので、鉄の踏板の裏に半円形の刃を溶接したもの。踏板の側面に4つのフックが溶接されており、フックに縄を掛けて両足に履き、稲の古株を踏み割る。富山県水見市ではカブワリ(株割)。											
 くれわり塊割	麦の播種前に「くれ」(土塊)を砕きつぶすもので、埼玉県ではツブテッコワシ。竹の長い柄にT字形に横木をつけた横樋タイプと、縦木に木の長い柄をつけ、縦木の裏面に鋸歯を刻んだり歯を植え込んだものがある。						クレワリ、ドロカチ	クレワイ				














※備考欄にはあなたの地域の呼称を記入してください














名称	説明	只見	奥三面	羽村	沼津	徳山	滋賀	鹿児島	沖縄	さまざまな呼称	備考
 どろよけ 泥除け	湿田の耕起の際に鍬の柄を通して泥の跳ね返りを防ぐ用具で、板製や竹編み・蔓編みのものがある。会津ではテヅラ、富山県水見ではテドリ、テデ。	テヅラ					x				
鋤と踏鋤	鋤類には全長が胸のあたりで刃と柄が直線上かやや鈍角につけられ、真下に踏み込む短身鋤と、全長が肩の高さを超え、斜め前方に踏み込む長身鋤タイプがある。ここでは前者を「鋤」、後者を「踏鋤」と分けて記述した。										
 すき 鋤	刃と柄が直線上かやや鈍角につけられた人力の耕起具。シャベル・スコップに相当するもので、肩部に足をかけて踏み込む。溝掘りや一毛作田での冬の水抜き溝を掘るなど、土木具として使うことが多い。						スキ、ホリ	スキ		【鋤】かたがー・かまじゃくし・きつたてすき・こがら・しゃくし・しゃくれ・すきくわ・つきくわ・はびる・ふずき・へら・ほり 【手鋤】ふくすい・ほすくい以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【鋤】かまじゃくし・しゃくし・ふずき・へら・かまじゃくし・すきくわ・ほり 【手鋤】ほすくい 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）	
 ふみすき 踏鋤	全長が肩の高さを超える長身の鋤で、鋤平と柄は鈍角に前屈し、踏板か床尻に足をかけて斜め前方に数度踏み込み、柄を下げて梘子の原理で畑を起す。鋤床と柄が柄組みの中部・関東型と一本造りの東北型がある。			フンガア			x		x		
 げたびっちゅう 下駄備中	鉄製4本歯の鋤の柄の根元部分から後方に梘子棒をつけ、その先端に下駄をつけて履く。もう一方の足で鋤の肩を踏み込んで、柄を手前に倒すと梘子の原理で土塊が前方に返される。東海地方や滋賀県で湿田土壌の耕起に重宝された。「ハネクリビッチュウ」「チョンコロ」とも呼ばれた。						ゲタスキ				
スキとカラスキ	奈良時代から江戸時代まで、古辞書でも和歌でも牛の引く犁はカラスキと呼ばれ、人の使う在来スコップをスキと呼んで明確に区別されてきた。明治になって福岡の抱持立犁が深耕犁として人気呼び、農商務省も高く評価したので、九州方言のスキが農学での標準語のように広がったが、鋤との区別がつきにくくなった。ここでは本来の姿に戻して牛馬の引く犁はカラスキ、人が踏み込む鋤はスキと呼び分けることを提案したい。										
 からすき 犁	牛馬に引かせ耕地を耕す畜力耕起具で、犁轅・犁柱・犁身の3部材で構成される三角枠無床犁と、犁轅・犁柱・犁床・犁柄の4部材で構成される四角枠長床犁、それに両者の要素の入り混じったタイプがある。江戸時代には西日本では小農民まで普及したが東日本では普及が上層農民にとどまり、犁耕しない地域も混在した。東北地方では明治時代に福岡の馬耕教師の活動で犁が初めて広がった。		バツコウ				スキ、カラスキ、ゴウスキ、シュウス、キ、ハザコスキ	スキ、ネコ、イザイ、ヤスキ、オコ、マシ、イザイ		【犁】いだい・こがら 【唐犁】かのから以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）	
 きんだいたんしゅうすき 近代短床犁	九州の在来短床犁をベースに犁柱を鉄製のボルトに、犁轅と犁身の接合は鉄製ジョイントにし、鋤物の床金をつけた改良犁。明治の末に開発され、大正・昭和期に各地に広まって、畜力耕起具の主流となった。もとは左反転（高知県は右反転）固定の単用犁だが、レバー操作で犁への左右の向きを変えられる双用犁や、犁先の前に小型の犁先を追加した二段耕犁も開発された。	バコウ、バコウゴウ、ニダンコウ			スキ	スキ	カラスキ	オコシ			
 plow プラウ	明治初年に北海道開拓に導入された北欧犁で、犁先と一体の右反転の撥土版を備えた双柄犁。第二次大戦後、小型に改良され東北地方や開拓地で使われた。										
 cultivator カルチベーター	牛馬に引かせて裏作妻の畝立て・中耕・土寄せ・除草に使う鉄製農具で、前に小さな車輪があり、後ろに犁先、中ほど左右に土掘り爪がつき、2本の把手がつく。昭和22年頃から使われはじめ、鉄で1日掛かった畝立てが1時間ですむと歓迎されたが、30年代に動力耕耘機が出現すると取って代わられた。				カルチベーター	カルチベーター	カルチベーター				
人力犁	「人力犁」という言葉は人によって指すものが異なり混乱を招いている。人力で使う犁には①人が牛代わりに引くタイプ、②男二人が向き合って犁轅先と犁身先を握り、かけ声を掛け合って土を起すタイプ、③T字形把手の付いた犁轅先を握って後退しながら引くタイプの3種類がある。ここでは分類名としては①を「人引き犁」、②を「二人犁」、③を「後退引き犁」と呼んで区別することにし、民俗語を尊重する方針から①は夫婦犁、③は源五兵衛犁とした。										
 めおとすき 夫婦犁	牛馬の代わりに人が引く犁で、山梨県の「夫婦犁」は妻が引き、夫は犁身にもたれ込んで押しながら耕起する。南アルプス山麓の旧巨摩郡に分布し、入植時に牛馬が手に入らなかった高句麗難民の工夫が始まると考えられる。富山県氷見市の「ヒトンマ」は小型の在来犁を女性が数人で引くもので、男が漁業に出る漁村の水田の漏水防止の代犁きに使われたもので、近代起源である。										
 ふたりすき 二人犁	男二人が向き合って細身の三角枠犁の犁轅先と把手を握り、リズムを合わせて犁先を地面に差し込み土をはね上げる田畑の耕起具。岐阜県高山市の山間部ではヒッカ（引鋤）、山梨県南アルプス山中ではフタリスキと呼ばれ、山梨県富士吉田市や神奈川県小田原市でも使われた。分布からは入植時に牛馬が手に入らなかった高句麗難民の工夫が始まると考えられる。							ヒトカラスキ、シノリ、キカラスキ			
 げんごべえからすき 源五兵衛犁	畑の中耕具で、長床犁の犁床に斜め上方に伸びる引棒をつけ、人は犁柱につけた縄を掛け、引棒先端のT字形把手を持って後退しながら引く。妻の畝間を引いての土寄せや、野菜畑の耕しに使った。『農具便利論』（1822）には「源五兵衛犁」の名で掲載され、西日本では広く使われた。						x	ナカヒキ	ウザイ		
















名称	説明	只見	奥三面	羽村	沼津	徳山	滋賀	鹿児島	沖縄	さまざまな呼称	備考
 まぐわ 馬鋤	田に水を張ったあと、土塊を砕き均すための畜力代掻き具。櫛の歯状の台木に2本の引棒と鳥居形把手がつく。9~11本ほどの鉄製歯がつくが、20本超の木製歯をつけた均し馬鋤もある。古墳時代に伝来して全国的に使われた。	マグワ、マンガ、シロカキマンガ			マンガ、マシ、ロカシマンガ	マグワ、ウシシメ、ウシシメ	マグワ、ウシシメ、ウシシメ	マンガ、ワタイモガ	マーマガ	【馬鋤(まんが)】かいが・しか 以上、【標準語引分類方言辞典】(東條操編)	
 くるままぐわ 車馬鋤	通常の歯の前に回転歯をつけた馬鋤で、水田の荒起こし後や、稲刈り後の麦作のためのすき返し後の土塊を砕くのに用いられた。鬼馬鋤とも呼ばれた。江戸時代の『農具便利論』(1822)にも車馬鋤として出ている。				ハツタンコロガン		マグワ				
 うねたてまぐわ 畝立馬鋤	馬鋤の10本前後の歯の代わりに3~4枚のU字形板を間隔をあけて取りつけた変形馬鋤で、耕起後の畝立てに使った。九州地方だけで使われる朝鮮系農具で、ワタイモガ(新しく渡ってきた馬鋤)とも呼ばれている。							ワタイ、マシ、ウタイモガ、ハタケモガ			
 ひこうきまぐわ 飛行機馬鋤	折りたたみ式の両翼の下面に鎌刀歯を並べた畑用の砕土具で、畝間を牛馬に引かせ、人が乗って重さをかけた。水田農作の畝立て後、両側の畝を壊さないで砕土できるので、明治末年に発明されて以降、全国的に普及した。						サイドキ、ツチキリキ				
 たにあげき 谷揚機	水田農作の栽培で、犁で畝立てし飛行機馬鋤で谷の両側の畝の砕土をした後、谷揚機で谷に落ちた土を両側の畝に上げて整える。1920年代中頃からおもに西日本で普及した。溝ざらい機、畦立機(うねたてき)とも呼ばれる。						タニアゲキ				
 ふりまんが 振馬鋤	人が左右に振って使う馬鋤型砕土具で、台木に前後に振り分けた歯を植え鳥居形把手をつけたもの。おもに農作の畦床部分の砕土に使われた。鳥居形把手を2つ備えた二人用もあり、向き合って左右に放るよう振ることからホウリマンガとも呼ばれる。				ホオリマンガ、ニニンボウリ						
 かいてんばさいどき 回転刃砕土機	手裏剣型の回転刃をつけた畜力砕土機で、中ほどで折れ曲がり左右に後退した車輪に、左右3枚ずつ回転刃がつく。「砕土機」「刃車型回転砕土機」ともいわれる。水田の代掻きや藁やレンゲのすき込みにすくっていた。	サイドキ	ハナ					コラマ、クラカン			
牛馬の装具											
 くびき 首木	牛の頭に掛けて犁や馬鋤を引かせる牽引具で、中ほどで曲がった丸棒の両端に引綱をつける。中国や朝鮮半島では首木だけで引かせる首引き法だが、日本では首木と鞍を併用する首引き綱引き法や鞍だけで引かせる綱引き法が主流。	クビキ			クビキ		クビキ				
 はも	馬の頭につけて引綱をつけ、肩で引かせる西洋系の牽引具。下端で連結したU字形の木枠の内側に藁束を厚布でくるんだパッドを取りつけたもので、馬の頭に下から装着して頂部で留め、左右の枠の中ほどに引綱をつけて犁・馬鋤や馬車を引かせた。	ハモ			ハモ						
鞍	鞍は古墳時代に朝鮮半島から馬とともに「乗馬鞍」と「荷鞍」が伝わり、荷鞍を小型化した「農耕鞍」が生まれた。奈良時代には中国から遊牧系の「唐鞍(からくら)」が伝わった。平安時代には唐鞍に柄組みを加えた頑丈な「和鞍(やまとくら)」が誕生し、武士の鞍として江戸時代まで使われた。明治になると陸軍がヨーロッパの革製の乗馬鞍を導入し、また大正・昭和期に2輪、4輪の荷馬車が運送の主役になると、農耕鞍に鉄製の鞍棒受けをつけた「馬車引き鞍」が現れた。		クラ		クラ		クラ	クラ	クラ		
 のうこうぐら 農耕鞍	牛馬の背につけて農具を引かせる小型の鞍で、クラ・コグラ・ヒキグラ・タグラ・テーク(田引きカ)などと呼ばれる。腹帯で背中に固定し、むながい・しりがいで前後のずれを防いだ。伝統的農耕鞍は木製の鞍骨だが、バネの効いた逆U字形鋼帯の内側に、ズック地の厚手のパッドを取りつけた「近代独橋鞍」がメーカー品として流通した。	シロカシント、シロカキグラ			クラ	クラ	タグラ	ヒカセグラ			
 しりがせ 尻枷	牛馬に犁を引かせるための60~70cmの棒で、首木や鞍から伸びた引綱を尻枷の両端に括りつけ、その中点に犁を繋いで引かせる。しりがせ・しりがし・ヒキギ・ヨコガセなどと呼ばれる。						シリギ、カイボウ	ピンスイ			
 たかばよ 竹ばよ	牛馬に馬鋤を引かせるときに使う細い竹を使った引綱で、牛馬の左側にだけ使う。材はネマガリダケ。牛馬は転回する際に鼻取りに誘導されて右側に曲がる。そのとき左側の引綱が牛馬の後脚の肌を擦って傷つけるので、外側に湾曲した細竹のタカバヨを左側だけに用いた。福島県ではタカバヨ、ハイヨダケ、ハイヨダケ、富山県ではシチヨウダケ、タケベッチヨなどと呼ばれる。	タカバヨ									

名称	説明	只見	奥三面	羽村	沼津	徳山	滋賀	鹿児島	沖縄	さまざまな呼称	備考
 はなぎ 鼻木	牛の鼻に木製の輪を通し、手綱を結んで牛を統御するもので、ハナグリ(鼻鏡)とも呼ばれる。幼牛の鼻中隔の軟骨に穴をあけ皮をむいた若枝を蔓のように曲げて通したもので、原型は蔓の両端を交差させて括ったものだが、10cm余りの角材の両端に蔓を通してD字形に仕上げたものが中世にはすでに見られ、鼻木の主流となっている。						ハナギ	ハナグイ	ハナ		
 くつわ 轡	馬を統御するために馬の口に噛ませる金具で、中央で連結した長さ15cmほどの鉄棒(はみ)の両端に鉄環をはめたもの。連結部分を馬に噛ませ、両端の鉄環に面懸をつけて馬の顔に装着し、また手綱をつけて馬を統御する。左右の手綱を引けば銜が馬の舌を圧迫するので馬は言うことをきく。		クツワ								
 はなぎお 鼻竿	耕起や代掻き時に馬を誘導するための竹竿で3m前後。手綱では馬が近づいて危険なので、一定の距離を保てるように竿を使う。東日本では男は馬銜を扱うシンドリ(反取)役で女や子供が鼻竿で馬を誘導するハナドリ(鼻取)をつとめた。	ハナザオ	サセボウ								
 くつご 口籠	牛馬の口にはめて農作業中に作物を食べないようにする籠。竹籠や藁縄製、針金編みの籠がある。中耕・除草・培土など作物の成育した田畑で牛馬を使うときに用いた。	クチカゴ					クチカゴ、 クチフサギ		クチクイ		
種蒔・田植											
 たねいれ 種入れ	野菜の種を鼠に食われないよう保存しておくための容器で、壺やひょうたんなどが使われた。	フクベイ、 タネモイ レ、ユウゴ ウノタネイ レ		ヒョウタン		ツツ		タネモノイ レ	カナバイ、 サニム入 れ		
 たねまき 種蒔機	底を狭くした漏斗形の種箱に小さな二輪をつけ、柄を押して前進すると車輪と連動して木箱の底の繰り出し装置が一定間隔で種をすくしくみで、麦の種蒔きに使われた。				ハシユキ、 タネマキ			タネマキ			
 なわしろごと 苗代鋤	苗代の床面を擦って平らにする木製の鋤。左官の鋤を大型にした形で、蒔いた種を土中に擦り込むものにも使用される。長い柄をつけたタイプもある。	ナクシロコ テ			ナゼイタ、 ハロクリ	ナラシイタ		ナデイタ	スルイタ		
 なわしろしめ 苗代締め	苗代の代掻き後、泥を突き締めて表面を平らに均す道具で、横板に把手をつけている。把手は馬銜に見られる鳥居形把手や蔓を半円形に曲げたものがあり、多くは自製。	ナワシロシ メ、シメイ タ						ナラメ板、 イシヒキ	マーカ		
 たねみちあんつき 種籾鎮圧機	幅30cmほどの金網製ロールに長い柄がつけられたもので、苗代に蒔いた種籾を押さえつける。種籾は土を被せると発芽しにくいので、苗代の表面にやさしく活着させるための道具である。					ゴマ	モミオサエ ローラー			【種籾鎮圧機】網ローラ、メッシュローラ、 以上「写真でたどる農機具の発達史」	
 もみがらやき 籾殻焼	保温折衷苗代の床に撒く籾殻の黒焼き(燻炭)をつくる道具。ブリキ製の四角錐形の基台中央に長い煙突をつけたもので高さ90cm前後。台部と煙突の下半分ほどに小さな空気穴が空けられていて、火をつけた藁の上に煙突を据えて籾殻を被せて蒸し焼きにした。	ヌカカキ									
 えぶり 柄振	田植え前に田面を擦って均すための道具で、横板に柄をT字やY字に取りつけたもの。柄がY字に分かれて板に取りつけるタイプでは、押し引きによって板が前後に倒れるものが多い。	エンブリ、 テジロウ	イブリ		エブリ、エ ブリ、エボ リ、シロカ キ、シロナ ラシ、ナラ シダウ、ノ ロマ、ハリ クリ、ハロ クリ		エブリ、マ ダフ、マン ガカケ	エブリ、ム タオシ、ノ ロヒキ	ターノーサ		
 たぶね(小型) 田舟	湿田で苗を運んだり刈り取った稲束を運ぶための箱船で、長さ1m前後で底は前後が反り上がっている。弥生時代には一木を刳りぬいた田舟が使われていた。		コイヒキブ ネ		フネ、タブ ネ、ヒヤ フネ	ツツフネ、 フネ、オッ バ	タブネ	タブネ、ミ ウエフネ、 ナエフネ	フコ		
 たぶね(大型) 田舟	湿田地帯で人が乗り水路を往復して牛や稲束を運ぶ底の平らな舟。				フネ、タブ ネ		タブネ、ヒ ラタ				
 なえかご 苗籠	苗代から田植えする田へ苗を運ぶ籠で、天秤棒の前後につけて運ぶ。苗入れは皿状から深さをもつ籠など多様で、天秤棒に縄で吊すタイプから棒に直接取りつけたタイプなど様々な形態がある。	ナエカゴ			ナエカゴ	ナエトリカ ゴ、メカゴ	ナエカゴ	イネフイ			
 おおし 大足	泥田に肥料用の刈草(刈敷)を踏み込んだり、田面を擦って均すための大型の木枠で、草を押し込む横板を並べ鼻緒つきの長板を取りつけたタイプが主流。前枠に取りつけた縄を引き上げながら歩行する重労働で、男の仕事だった。				オオアシ		オアシ、ウ アシ	タゲタ、ア シダ	×		
 たうえなわ 田植縄	田植えの間隔を一定にするための縄で、目盛がつけられていたり、糸巻に巻くものもある。田面を転がす田植枠が使われると、枠が曲がっていかないように田植縄を張って基準線とした。				ナワハリ、 ナワバリ	タウエナ ワ、シヨ ナフ	タウエナ ワ、タビ ツナ	タウエツナ			
 たうえわく 田植枠	苗を縦横そろった正条植えにするため、田の土に筋痕をつける木枠。梯子形、三角枠、六角枠もあり、六角枠は田面を転がせて枠の交点に植える前進田植えとなった。	タウエワク	ワク		ワク	ワク	タウエワク	タウエワ ク、カタツ ケ			
















名称	説明	只見	奥三面	羽村	沼津	徳山	滋賀	鹿児島	沖縄	さまざまな呼称	備考
 かたつけき 形付け器	2~3mの桁に株間に合わせた細棒を10本前後、目の粗い篩のようにつけ、桁の中ほどに柄をつけたもので、田面を引きずって田植えのための筋をつけた。				センビキ、スジヒキ			カタツケ			
施肥・除草											
 じょれん 鋤簾	鋳製の農具で鋳平部分に竹簧や金網をつけて水で切って砂利だけを掬えるようにした農具で、柄から鋳平を支える鉄製の蔓がついている。田畑の土寄せや土入れ、溝掘りや、砂利の掻き上げなど、広く使われた。	ジョリン		ジョレン	ジョレン	ジョオレン、ガム	ジョレン、ジョリン	ジョレン		【鋤簾】よぞろ 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）	
 むぎのつちいれ 麦の土入	麦の株間の土をすくって株の間に振り入れ、麦の生長を助ける道具。網底の土すくい長い柄をつけたもので、スプーン型で前進して使うタイプと、鋤簾型で手前にすくって後退しながら使うタイプがあった。				ムギノツチイレ、ツチイレキ		ムギノツチイレキ	ツチイレキ			
 りんでんつちいれき 輪転土入機	牛馬に麦の畝間を引かせ、車輪の外周に取りつけたバケットが土をすくって真上にきたときに両側の麦の株間に土をかけるもの。戦後にかなり普及した。										
 こえおけ 肥桶	下肥を入れて天秤棒で前後に吊るして田畑まで運ぶ桶。米のとき汁や風呂の残り湯を溜めたものも運んだ。	フリオケ、コイオケ			ツケオケ、コイオケ、ションペン、オケ	ダラオケ、ションペン、オケ	コエオケ、シモゴエオケ、タゴケ	コケオケ	クエウキー	【肥桶（こえおけ）】あけおけ・おりつぼ・こえめこ・こーだる・こが・こがつぼ・ひおけ 【肥桶（こえたご）】えんこたんこ・かすきおけ・かすきたる・かたねおけ・かたのけ・けすおけ・けすたる・げすたんか・さんしゃく・さんしゃくたが・さんしゃくもん・しょんべき・しょんべけ・しょんべんこ・しょんべんぶり・しょんべけ・たご・だたご・たおけ・たおけ・たが・たがおけ・たご・たごおけ・たごけ・だつおけ・たぶりんこ・だぼ・だら・だらおけ・だりおけ・たる・たる・たんか・たんかおけ・たんこ・たんこおけ・だんぼ・たんぼ一だ・つのおけ・とーご・ぶりんこ・ぶりおけ・ぶりんこ・ぶりんこ・ふるおけ・やしや一おけ・よつたる 【背に負う肥桶】おねおけ・たる・たろー 【下肥をためておく桶】あけおけ・いつぼ・うつし・げすため・ころがし・ころぼし・つぶけ・つぼ・つぼ一け・つぼけ・つぼんど・ときたが・はず。 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【肥桶（こえたご）】うせたご・かけ・かたねおけ・かたのけ・けすおけ・さんじやく・しょんべき・だんぼ一・ぶりんこ・ぶりんこ・よつたる・けすたる・たがらおけ・だつおけ・ためおけ・さげ・だらおけ・たご・つましりおけ・やな以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）	
 こえだる 肥樽	下肥を入れて遠くの田畑まで運ぶ桶で、細長く中味が漏れないように、蓋と栓がついている。馬の鞍の左右に2本ずつつけて運んだ。	コエダル		コエダル		コエダル、ションペン、オケ		コエタンゴ			
 くまで 熊手	厩舎や堆肥置き場で掻き寄せたり掻き混ぜたりする道具で、形はまたぐわに似るが、歯の先は尖って軽い。2本歯、3本歯、4本歯がある。	コエダシ	コエダシクマデ		コマンザライ		マヤダシクワ			【熊手】いっぼで、かいどし・かじくわ・かながき・かまがき・かやかきぼ一・がんぎ・がんぎき・がんざらえ・がんじき・がんじよき・がんずめ・がんずり・がんせき・がんでき・がんりき・こきばかき・こくばかき・こくばさで・こくまで・こくもかき・こたさで・こつばかき・こつばさで・こでかき・こなし・こみかき・こみさらい・させかき・さで・さでかき・さでかきさらえ・さではき・さでま・さらい・ざらかき・さんぼんずめ・すくずかき・すくぞかき・つめくわ・てんび・ぼら・ぼりん・ぼりんかき・ぼりんはき・ぼれん・ぼんじ・ぼんで・びびら・びぶら・びんびら・べぶら・べるば・まくわ・まんが・もくさで・よつくわ・よつで・わらすくり 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【熊手】かき・かしげ・かちばき・かつつおび・かながき・かまがき・かやかきぼ一・がんぎ・がんぎき・がんじき・がんずり・がんせき・がんりき・くさかき・くすかき・こーかき・こかき・こくばかき・こくばさで・こたさで・こでかき・こまかき・こまでざらい・こまんざらい・こみかき・させかき・さで・さでかき・さではき・さでま・さらえ・すくずかき・てざらい・ぼりん・ぼりんかき・ぼんじ・ぼんち・ひきまた・びびら・びぶら・びんびら・まつばかき・さらい・まんが以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）	
 こえだしかぎ 肥出し鉤	堆肥を掻きだすのに用いる鉤状農具。長い柄に小型の又鋤をつけたものや、東北地方では自然木の枝分かれ材を使って枝先を尖らせ、柄はへ字に曲ったものが多い。	コエダシカギ、コエダシカギ									
 こえおいこ 肥負子	口の開いた目の粗い背負籠で、ランドセル状に背負って堆肥を運ぶ。頭を保護するため背にあたる部分を高くしたものもある。	ソラック	コエショイカゴ			コエバコ			x		
 こえびしゃく 肥柄杓	小型の桶に1.5mほどの長い柄をつけた肥汲み用の柄杓。肥溜から汲み上げて肥桶に移す。また肥桶で運んだし尿を田畑に散布したり作物に施すときに片手で使う柄の短かい肥撒き杓がある。	コイビシャク				コイビシャク		コイカケ		【下肥をくむ柄杓】あけしゃく・くみだし・だらびしゃく・だらびしゃく・だるびしゃく・ながえ（便所汲み出し用）以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【肥柄杓】かくましぼ一 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）	
 こえかけ 肥掛け	手桶に竹製の注ぎ口をつけた施肥具で、澄んだ下肥を畑作物にねらい打ちで追肥する道具。形から湯桶とも呼ばれ、ヒョットコと呼ぶ地域（東京都）もある。			ユトウ							













名称	説明	只見	奥三面	羽村	沼津	徳山	滋賀	鹿児島	沖縄	さまざまな呼称	備考
 たればかま 垂袴	馬の背鞍に木杵を載せ、左右の杵に編繩の底なし袋をつけ、裾を括って堆肥などを入れ、畑に着くと裾をほどいて堆肥をまく肥料運搬具。	ピク						コエムチオ ーダ	シーブ		
 じょそうつめ 除草爪	水田の雑草を手で掻いて除草し攪拌するときの爪の保護具。竹製や鉄製で指先にはめて使う。					ツメ	クサトリツ メ		x		
 がんづめ 雁爪	3~4本の湾曲した鉄製歯に短い柄をつけたもので、両手に持って稲株間を掻いて除草する。打ち込んで手前に返すと草は土に埋まり、また稲の根を切ることで生長がよくなる。除草と中耕機能を兼ねたもの。	ガンツメ	ガンツメ			ムカデ、テ グワ	ガンツメ		x	【草取り用具】かじり・かつお・がんづめ 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）	
 たかき 田掻き	中腰作業の除草を立ち作業に変えたもので、舟形枠に爪つき横棧を数本わたし、斜めの柄をつけて田面を前後に掻いて除草する。江戸時代に中国から伝来したと考えられ、回転除草機の原型となったが、並行して使われた。タカキ、カメ、ドンガメ、オカメサンなどと呼ばれる。						メンバ、タ カキ	ソロッパ カキ			
 かいてんじょそうき 回転除草機	固定歯の田掻きの改良型の除草機で、舟形枠に回転爪を前後にセットし、斜めの柄をつけて田面を前後に掻いて除草する。爪の工夫や左右2連で株間をまたいで除草するものなど、多様な形態が見られる。田打車、八反取りなど、名称も多様で形態とは対応していない。	ジョソウキ	ジョソウキ		ジョソウ キ、タコ ガシ	ゴロゴロ クマ、ク サトリ	ジョソウ キ、タウ チ	タグイマ、 ハツタン グマ、タ ルマ カキグルマ		【回転除草機】オシガンツメ、ガンツメ、クサトリ、クサトリキ、クサトリグルマ、ゴロオシ、コロガシ、コロバシ、コロバン、ジョソウキ、スイデンジョソウキ、タイチ、タイチグルマ、タウチグルマ、タウチデンジャ、タオシ、タオシグルマ、タカキ、タカキグルマ、タグルマ、タコロガシ、タスリ、タノクサトリ、タホリガラガラ、ガラガラ、テオシジョソウキ、ハツタン、ハツタンコロガシ、ハツタンズリ、ハツタンボ、オオラチ、ラチウチキ、オニグルマ、キカイク、テンシャ、ムカシタグルマ、以上、右野律子調査	
 くさげずり 草削り	畑の除草に用いる鋏で、小型の半円形の刃がつく。『農具便利論』（1822）では河内地方でアブラゲマンノウ（油揚万能）と呼んだとある。	クサカキ				チョッカ イ、コ コチ ビ				【草削鋏】かいかい・くさかじり・さくきり 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）	
 くさかりがま 草刈鎌	三日月形の内湾刃に柄をつけた草刈用の鎌で、江戸時代までは稲刈りの鎌もこの形だったが、北陸で鋸刃の稲刈り鎌が出現、近代になって柄と刃が鈍角の稲刈り鎌が一般化して、本来の鎌が草刈り専用ようになった。	クサカリガ マ	クサカリガ マ	ナタガ マ	クサカリガ マ、ウサ ガマ	レンゲガ リ	クサカリガ マ	クサキガ マ	イラナ（カ マ）	【草刈り用の小さな鎌】かいがま 【除草用の鎌】せせり 【草刈り用の刃の強い鎌】かりかま 以上、『標準語引分類方言辞典』（佐藤亮一） 【除草用の鎌】かいがま・せせり 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）	
灌漑											
 ふみぐるま 踏車	稲の生長期の水田に水を入れるための足踏み式水車で、ミスグルマ、スイシャ、ジャバラとも呼ばれている。スポークごとに水掻き板のついた直径120~150cm前後の木製水車で4分の1周分を覆う袴と放水桶をつけたもので、水路に支柱を立てて樋を畦道に掛けて設置し、支柱につかまって水車の上に乗って階段を上るように踏んで水車を回す。17世紀後半に発明され、一人で運ぶことができる。竜骨車に比べて部品が少なくほとんど壊れないので全国に普及した。				フミグル マ、ミス グルマ		ミスグル マ、ジャ グルマ				
 すっぽん	15cm角で長さ2~4mほどの木製角筒に弁つきのピストン棒を仕込んだ揚水ポンプで、江戸時代からスッポンと呼ばれていた。水路に斜めに設置し、T字形把手を両手で握って棒を押し込めば弁が開き、引けば弁が閉じて水が筒からあふれ出る仕組み。踏車の揚水高が50cm程度だったのに対して、3mほどでも汲み上げることができた。	ミスヒキ ポン プ									
 りゅうこっしゃ 竜骨車	長さ3~5mの長い木枠に角桶と数十枚の水掻き板つき木製チェーンを仕組んだ中国伝来の灌漑用具で、水路に斜めに浸けてハンドルを回して水を掻き上げる。戦国時代から江戸時代にひろく使われたが、部品数と接合部が多くてメンテナンスが必要で、故障の少ない踏車に取って代わられた。滋賀県など一部では第二次大戦後まで使われた。						リュウコ シ、テン グリ				
 りゅうびしゃ 竜尾車	直径30cm長さ2~3mの薄手の筒桶の内部に螺旋を仕込み、上端に鉄製ハンドルをつけた灌漑用具で、古代地中海地方で使われていてアルキメデススクリュウと呼ばれる。下端を水路に浸けて斜めに設置し、ハンドルを回すと筒自体が回転して上端から水があふれ出る。江戸時代はじめに中国から伝来し、水田の灌漑のほか鉱山の排水にも使われた。水上輪（すいしゅうりん）とも呼ばれた。						サザエガ ラ、サザ エ				
 ふりつるべ 振釣瓶	水汲み桶の左右の上端と下端に長い繩をつけ、2人が畦で向き合って桶の上下繩を操って桶を水路に投げ入れ、勢いよく桶を振り上げて田の上で左右の繩を操作して桶口を下に向けて水を吐き出させる。中国伝来農具で江戸時代から使われており、投げ釣瓶、フリニガイなどとも呼ばれる。										
 みずかけおけ 水掛桶	天秤棒で運ぶ水桶の底に直径3cmほどの穴をあけて開閉自在の蓋をつけ、蓋から40cmほどの操作棒をつけ、閉じた状態で水を汲み入れ、畑の畝の上で棒を引いて蓋を開いて灌水する。『農具便利論』（1822）では「水かけ桶」、『縮圃要務』（1833）では「底穴桶」。畿内では綿作や野菜畑の水やりに広く使われた。大阪ではソコスケタンゴ。						ミスモチ ン ヨソガ				











名称	説明	只見	奥三面	羽村	沼津	徳山	滋賀	鹿児島	沖縄	さまざまな呼称	備考
 virtical pump バーチカルポンプ	直径30cm前後、長さ2m前後の鉄製筒の内部下端にスクリーンをつけ、軸の上端にプーリーをつけて発動機とベルトで繋いで回転させると上端の吐出口から勢いよく水が吐き出される。灌漑のほか洪水時の排水にも使われる。				バーチカルポンプ						
 こうどけい 香時計	抹香の燃える速さが一定という原理を使って溜池の水を公平に配分するためなどに使われた箱形の時計で、民俗語は「香盤」。2つ重ねの「重箱型」と上箱・下箱の間がくびれた「括れ型」があり、どちらも上箱が回転する。格子の蓋をあけ、上箱の灰面に香道のスリットを刻んだ型枠を当ててスリットに香を蒔き、香の燃える長さで時間を計るしくみ。										
害虫・害獣除け											
 ゆうがとう 誘蛾灯	田のそばに設置して夜中に点灯し、稲の害虫のニカメイガ（二化螟）などをおびき寄せて取る道具で、直径40cmほどのブリキ製の水盤に水を張って石油を数滴たらし、真ん中にカンテラ灯を据えて蛾を集めた。形態は多様。ニカメイガ（ニカメイチュウ）は6月と7～8月の2度大発生する害虫で、幼虫はイネノズイムシと呼ばれる葉のなかに潜んで食害する。1952年から農業ホリドールが散布される以前はさかんに使われた。						コウガトウ				
 あぶらさし 油差し	竹筒の底に小さな穴をあけた油入れ。尖った竹棒を挿して栓とし、時々栓を抜いて油を田面に落とすとして扱がらせ、稲に水を掛けウツカをたたき落として油で飛べなくし、気孔を塞いで死なせる。江戸時代後期から鯨油を使って防除し、明治以降は石油を使うようになり、ブリキ製円筒の油差しも現れた。							アブラサシ			
 どろおむしくじょき 泥負虫駆除器	30cmあまりのブリキの桶形の虫受けに長い柄を斜めにつけたもの。桶を横に扱うようにして稲泥負虫や稲青虫の幼虫を捕り、殺虫剤を入れたバケツに虫を落として殺した。農業散布の広がる前、昭和10年代頃まで使われた。新潟県でデロハキ。										
 ふんむき 噴霧器	薬剤タンクをランドセルのように背負い、弓なりに曲がったレバーを左手で上下させてタンクに圧力をかけ、右手に長いノズルを持って農薬を散布するもの。	フムキ					フムキ				
 かび 蚊火	山野で働くとき、腰につけて蚊やブユ（ブヨ・ブト）を煙でいぶして追うもので、古布に髪の毛やヨモギの葉など匂いのきついものを混ぜ、細長くして薬などでかたく縛った。	ヒナフ			ヒナフ	カビ	カンコ	ホチエ		【野山仕事の蚊遣火】かこー・かっこ・かぼて・こて・かび 【藁などを束ねた蚊遣火】かび・かべ 以上、【標準語引分類方言辞典】（東條操編）	
 かかし 案山子	稲刈り前の田に立てて鳥獣を追い払うための人形。毛髪や動物の毛を焼いて匂いで危険を察知させて追い払うカガン（嗅がし）が語源とされる。	カカシ			カカシ カカシ ソメ カカシ カカシ	カカシ	カカシ			【案山子】いっさんぼー・おっじも・おっしもん・おどしてこ・おどかし・おどりかし・おどろかし・おのし・おろし・かーがー・かかしたるー・かかしたるー・かかしんぼー・からすおどし・からすとぼし・からすのおどし・からすのとぼし・がんおどし・しめ・すずめおどかし・すずめおどし・すずめのおどし・すずめよけ・ぜんもん・そーど・そめ・たのぞめ・でーこ・でこすけ・でこまつ・とーぼし・とぼし・とりおどし・なーしるまふい・にんぎょー・にんじょー・ぬきむぬ・はじきざお・ほーたまふる・ぼーとー・ももんがー 以上、【標準語引分類方言辞典】（佐藤亮一） 【案山子】いっさんぼー・おどし・おどかし・おろし・かかし・からすおどし・からすとぼし・がんおどし・しめ・せめ・そーず・そめ・とーぼし・とぼし・とりおどし・なーしるまふい・ぼーとー 以上、【標準語引分類方言辞典】（東條操編）	
 おどし 威し	稲刈り前の田に立てて鳥獣を追い払うため、鳥の死骸やそれに見立てた黒布などを棒の先につける。				オドカシ オドシ オソカシ			オドシ			
 なるこ 鳴子	音で驚かせて稲の害虫・害獣を追い払う道具で、小さな板に縄で竹管を並べて取りつけたもの。苗代や稲の実った田に竹棒を何本も立てて縄を張り巡らせて鳴子を鳴らして追い払う。山田では小さな田屋を立てて夜通し番をし、猪や鹿がくると鳴子を鳴らして追い払った。古語ではヒタ（引板）。				オドカシ ガンガラ ナラコ ナリコ フエ ノカカシ		ナルコ	オドシ		【鳴子】おどかし・おどし・がっチャリ・からすおどし・からすのおどし・かわどーずき・すずめおい・すずめおどし・すずめのおどし・すずめほい・すずめほい・どーずき・とりおどし・どんずき 以上、【標準語引分類方言辞典】（佐藤亮一） 【鳴子】おどし・がっチャリ・がらから・がらくた・がらんがらん・がらんがらん 以上、【標準語引分類方言辞典】（東條操編）	
 ばくおんき 爆音器	カーバイト（炭化カルシウム）に水を垂らしてアセチレンガスを発生させ、圧力が高まると点火して爆発し、大音響で鳥獣を追う装置。										
収穫・脱穀											
 ほつみぐ 穂摘具	粟やキビなどを刈り取る道具で、木片に鉄刃をつけ、木片に通した縄の輪に指を通して、掌で包みこむように穂を刈り取る。	コウガイ					x	イザラ、ツイラナ メ、タケベ ラ			
 むぎつみぐし 麦摘み櫛	柄に十数本の竹筒を少し隙間をあけて並べた櫛で、麦の穂を1本ずつ摘み取るのに使う。						x				

名称	説明	只見	奥三面	羽村	沼津	徳山	滋賀	鹿児島	沖縄	さまざまな呼称	備考
 鎌	内湾した刃と柄がL字形に接合され、稲麦や草・木の枝などを手前に引いて切る刃物。刃の厚さは稲・麦を刈る薄鎌、牧草・雑草を刈り払う中厚鎌、柴や木の枝を刈る厚鎌がある。昭和に入って稲刈りには刃と柄が140度前後の鋸鎌が普及した。	カマ			カマ	カマ	カマ	カマ、サヨ イラナ、カ リガマ、シ マ(ハマ) ヨエモン ガマ、カセ ダガマ		【鎌】あやぎがま・あやがま・いざら・い 一あら・いなら・いらな・いらら・い んら・いんだ・がき・がき・がき・が 以上、『標準語引き方言辞典』(佐藤 亮一) 【鎌】いらな・いんだ・がき・すへん 以 上、『標準語引分類方言辞典』(東條操 編)	
 のこぎりがま 鋸鎌	稲刈り専用の鎌で刃と柄が140度前後の鈍角に接合され、刃には鋸目が刻まれて、手前に引けば鋸刃で引き切るしくみになっている。	イネカリカ マ	ノコギリガ マ	ノコギリガ マ	イネカリガ マ、ノコギ リガマ	ノコギリガ マ	ノコギリガ マ	カマ、イネ カリガマ	イラナ(カ マ)		
 いねかりき 稲刈機	立ったまま稲刈りができるように工夫された農具で、刃部を稲の根元に当てT字形把手を両手で握って一気に押し切る。第二次大戦中に農村の労働力不足対策として発明され昭和30年代まで使われたが、バインダーの普及で使われなくなった。		イネカリキ			イネカリキ	イネカリ キ、バイン ダー	イネカリキ			
 たげた 田下駄	湿田での稲刈り作業などで、体が沈まないように履く大型の履物で、鼻緒のついた縦長の板の周りに竹や木の円棒をつけた輪かんじき型、板に足受け棒のついたなんば型などがある。				ナンバ、ア ラガタ、 アセボクリ		タガタ、ナ ンバ	タガタ、フ ンゴミガタ			
 こきくた 扱管	稲の脱穀に使った道具で、2本の細竹を紐で繋いだもの。長さ5cmほどの掌に納まるものと、18cm前後で手からはみ出るタイプがある。江戸時代の千歯扱き普及以前は広く使われていたが、民具では奄美大島などにわずかに残る。『和漢三才図会』で「扱竹」、『成形図説』で「稲管」。奄美大島ではクダ、テクダ。						マメコキ、 コキパン	クダ、ムギ コキタ	フドース	【稲扱の道具】いにしにふどーし(筆の柄 ほどの竹を6cmくらいに2本切り、稗を差 し込んでつないだもの) 以上、『標準 語引き方言辞典』(佐藤亮一)	
 こきばし 扱箸	稲・麦などの脱穀に使われた道具で、細棒や割竹の根元を括り、隙間に稲穂を挟み込んで扱を抜いて脱穀する。石臼の穴に立てたり、台木に立てて使うタイプもあった。千歯扱きの普及で姿を消し、ほとんど残っていない。							クダ、ムギ ユキイタ	クーダ	【稲扱の道具】いなばし・こいばし・こ いばし・こき・こきばし・こきばし・こき んばし・こばし・せらみよー 以上、『標準 語引き方言辞典』(佐藤亮一)	
 せんばこき 千歯扱	木製の台木に鉄歯を20本ほど飾状に並べて固定し、歯の隙間に稲束を差し込んで扱う道具。明治になって刃を湾曲させ、両端でも徳切れが起こらない湾曲千歯も現れた。麦用の千歯扱きは刃と刃の間に隙間がある。足踏み脱穀機が普及して使用は減ったが種籾だけは千歯扱きを使うという人もいた。	センバコ キ、センバ	センバコキ	センバコキ	マンガ、セ ンバコキ、 イネコキ、 ンガ	イネコキ	センバコ キ、イネコ キ	センバ、ム ギセンバ、 マルセン バ、カナク ダ	シンバ	【稲扱の道具】せんば・せんばこき・せん ばこき・せんばすこき 以上、『標準語 引き方言辞典』(佐藤亮一) 【稲扱・稲扱機】いなひき・かなこき・こ いばし・せんば・ぶり・まんが・まんが い・もみこなし・いねがし・まんりき 【稲扱機】いざゆき・かなくだ・かなこ かなこばし・からはし・かんこ・こえば し・こーばし・ごけおし・ごけなかせ こじよろ・こばし・せんこき・せんたご き・せんばこき・せんばすこき・たかせ やまめ 以上、『標準語引分類方言辞典』 (東條操編)	
 あしふみだっこき 足踏み脱穀機	ループ状の釘を多数打ち込んだドラムを足踏みで回転させ、稲束から粒をはじき飛ばして脱穀する道具。大正時代から普及し、千歯扱きに置き換わっていった。朝鮮半島や中国にも広まった。	イネコキ カイ	アシフミ ダッコキ	リンテン ンバコキ、 ンガ	イネコキ キ、ア シフミ	イネコキ	ダッコ キ、ガ イコ ン	アシフミ ダッコキ、 タッコキ			
 まきぼう 巻棒	麦束をしっかりと挟み、白の胴や大きな石、麦打ち台に打ちつけて穂を落とす道具。南九州で使われる。						×	マキボウ、 マツボ		【豆の実をこきとる道具】からはし・ばい 以上、『標準語引分類方言辞典』(東條操 編)	
 もみたたき 粃叩き	千歯扱きで扱いた時の穂切れや、穂の芒(のぎ)を落とす道具。先を太く手元を細くした曲がり木や、棒に古い鋸を逆装着して鋸の背で打つものなど、さまざまな形がみられる。福島県ではモミヨウシ。	モミヨウシ ボウ、ヒラ バモミヨウ シ、ボウサ ラオウシ、 モミヨウシ			ホ、ツブテ コーン	パイ、イヤ キボウ	ダッコイ ボウ、ヤタ チボウ	タタキ ボウ、タタ チボウ		【そばの実をたたく棒】こてぼー・にほん がらはし 以上、『標準語引分類方言辞 典』(東條操編)	
 のぎおとし 芒落とし	昔の稲は芒が長く、調製過程で邪魔になるので、脱穀後に芒落としがおこなわれた。唐竿打ちもその一つだが、鹿児島県では竹の柄の根元に竹筒いくつも縛りつけて穂を突くサーンが使われた。福島県では堅杵の一方をマイナスドライバー状に加工したものもある。						×	サシガッ チ、サン			
 おにば 鬼歯	麦打ち用の柄長の木槌で、杵部は太く短く、立って振り下ろしたときに下面が地面に密着するよう斜めに削り、鋸歯目を刻んでいる。麦や豆類の脱穀に使った。				アオ、オ、オ ニバ、タタ キ			ドンデ、オ ンバ			
 からさお 唐竿	竹や木の柄の先や竿の先に、回転軸を介して棒や割竹・枝などを編んだ打穀部をつけ、竿を振って打穀部を回し、地面に広げた穂に打ちつけ脱穀する道具。大麦・大豆・小豆・蕎麦の脱穀や稲穂の芒落としに使った。打撃部には車軸や籠状、回転軸のあるものや紐繋ぎのものなど、多様な形態が各地に見られて単系進化では説明できない。関西ではカラサオ、関東ではクルリボウ。			クルリボウ	クルリボウ		カラサオ、 マイサオ	メグイボ ウ	クルマボウ	【連枷】かちんぼー・くるぼー・くるま ぼー・くるり・くるりぼー・けんが・ね ぶりぼー、はいがち・ばいなが・はてっ ぼー・ぶり・ふりうち・ぶりこ・ふりば い・ふりぼー・ふるちがえし・まいぎね むがりぼー・めぐりぎね・めぐりぼー まえざお・まんぶり 以上、『標準語引 分類方言辞典』(東條操編)	
 むぎうちだい 麦打台	長方形の4脚台に割竹の簧の子をやや凸面に取りつけたもので、小麦の脱穀用。麦束を持って穂先を簧の子に数回叩きつけて脱粒する。				ムギウチ ダイ、ムギ ウチダイ		ムギウチ ダイ	ス、ムギウ チダイ	ムジシイ ン		
 むぎすりき 麦すり器	大麦の脱粒用器具で、千歯で大麦の穂を扱落したあとを天目に干し、乾燥した麦穂を上箱に入れ、前後の往復運動で脱粒させた。										

名称	説明	只見	奥三面	羽村	沼津	徳山	滋賀	鹿児島	沖縄	さまざまな呼称	備考
 まとり	長さ50cmほどの二股や三股の自然木を利用した脱穀具で、ソバや大豆・小豆などの脱穀に利用する。股の部分で打ちやすいように、柄部分と反りをもたせているものが多い。マドリ・マメオトシなどとも呼ぶ。	マドリ、マメオトシ	ソバチバ、イ、テバ			マタ	×	マタボウ			
調製・選別											
 もみかき 籾掻き	稲藁や麦、雑穀等を天日干しにするとき、筵の上に広げたり、かきまぜてむらなく乾燥させた。長柄の先にT字形に横板をつけたエブリ形で、横板に鋸歯を刻んだり横木に木製歯を埋め込んだものもある。モミサガシ、サラエとも呼ばれる。				ヘロクリ、ナラシ			モミサガシ			
 もみどおし 籾通し	千歯抜きで脱穀すると籾に藁屑や穂のまざりしたものが多いので、そのなかから籾だけを選別する粗目の通し。甕類を編み上げた円筒形や、板製の吊し箱形など、多様な形態がある。ポータトオシ（富山）、ユリケンド（大阪）。	モミドオシ、メケイ			モミドオシ、アラド、オシ			トオシ、モミドオシ、ムツト、オシ			【籾をふるうのに用いる】かごどし。以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【竹製の籾篩】かごどし。以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）
木摺臼と土摺臼											
 きざるす 木摺臼	木製のすり臼で、上臼・下臼からなり、下臼には円錐摺り面に放射目が刻まれ軸棒が立っている。上臼上部はすり鉢状に削られて籾を入れる漏斗となり、上臼の穴は10cm前後で軸棒との隙間が供給口になっている。上臼の側面には縄穴が挟まれてそれぞれ2本の縄が結ばれており、2人が脚を投げ出して座って左右の縄を交互に引いて上臼を往復回転させた。上臼には軸受け棧がはめられて上臼のぶれを防いでいる。	キズルス			カラウス	ズリウス	×	モミスリウス、スリウス	シリウーシ		【大木を削り切りにして作ったのみすり臼】はたうす。以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一）
 どざるす 土摺臼	竹籠や桶の胴に塩を混ぜた粘土を詰めて固め、カシなどの堅木や竹の歯を8分画や6分画に平行して打ち込んだ摺臼で、摺り面は平面で遺木（やりぎ）を使って数人で全回転させる。戦国時代末から江戸時代にかけて中国から伝来し、江戸時代には効率がいいが碎米が出るとして幕府や藩からしばしば禁令が出たが、木摺臼に徐々に置き換わっていった。	ドズルス	スルス		カラウス	トウス、ドトウス		タカウス、ツチウス			【土製ののみすりうす】つちするす・どざるす・どざるす・どろうす・どろあし。以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一）
 ぜんかいてんきざるす 全回転木摺臼	木製の全回転臼で、九州には中国の木甕の後裔と見られる深い鋸目の全回転臼が見られる。それとは別に東北地方には木摺臼職人が土摺臼を真似て創ったと考えられる全回転で平坦摺り面に分画目を整で刻んだ全回転木摺臼が見られる。					ズリウス		モミスリ	×		
 おおうちわ 大団扇	稲や麦の実と芒、殻、ちりなどを吹き分ける大型の団扇で、箕で穀物類を落としながら団扇で扇いで軽いものを飛ばす。江戸時代からおもに西日本で使われた。										
 あおり 煽	稲や麦の実と芒、殻、ちりなどを吹き分ける道具で、2枚の三角形の大団扇を根元で連結し、長い竹を折り曲げて左右の中ほどに団扇を取り付け、上端を左右の手で握って開閉しながら効率よく風を送って、箕で穀物類を落とし落としながら軽いものを飛ばす。江戸時代前期からおもに東日本で使われた。										
 せんぶうき 扇風機	脱穀した籾と屑を吹き分けるための3枚羽の扇風機。クランクの根元に鍔物の歯車をつけて高速回転させた。				センブーキ、カザグルマ			センブウキ			
 み 箕	穀類・豆類を入れてほうりあげたり揺すったりして実とごみを選別する用具。ここではD字形の片口箕を「箕」と定義し、同機能を持つ円形の「ばら」と区別した。江戸時代に唐箕が出現したことで、稲作の選別作業での箕の比重がやや低下した。	ミ、カワミ、タケミ	ミ		ミ、ムギミ、フジミ	ミ、フジミ	ミ	ミ、ヒオキ、ミ	×		【箕】いしみ（粗い竹製）・いたみ（板製）・いたみー・うむい・おりみん・かわみ（木の皮製）・かーみー・さうひー・さんばらー・しのみ・しょーけー・しょーやぶり・すぎ・すーぎ・すーぎつていー・せきんもん・せくむん・せくもん・せつむん・ぞい・ぞーき・ぞーぎ・ぞーひ・たかみ・てみ・どいみ・とーし・とみ・はこみ・みーぞーきー・よぞり。以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【箕】かーみー・さんばらー・せくもん・ぞーき・ぞろ・みーじょーき・めかい【籾などを移す時に使う鹿取形の農具】かしり。以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）
 ばら	穀類・豆類を入れてほうりあげたり揺すったりして実とごみを選別する用具で円形に編んだもの。南九州から中国江南地方・東南アジアにかけて分布する。ばらは穀類や豆などを乾燥させる干し皿としてもよく使われる。						×	バラ、サン、バラ	ミーソーキ		
 とうみ 唐箕	籾摺臼にかけた後の籾殻・玄米・糠の混じったものを風で吹き分ける選別器で、江戸時代に中国から伝来したため「唐箕」と呼ばれる。右半分は回転扇を太鼓胴で覆った送風部、左半分は選別部で漏斗・選別胴、一番口・二番口・三番口からなる。	トウミ	トミ		トウミ	トオミ	トウミ、トウツフ	トーミン、トーミン			【唐箕】あおり・こめあうち・とあおり・とあぶち・とーあおり・とーあぶち・とーし・とわうち・とわおり・とわぶり・とんぐり・はっぴい・もみおろし。以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【唐箕】あうち・とあおり・とーあぶち・はっぴい。以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）

名称	説明	只見	奥三面	羽村	沼津	徳山	滋賀	鹿児島	沖縄	さまざまな呼称	備考
 とおし 通し	浅い円柱形の枠の底に網を張って揺すりながら穀類などを選別するもの。ここでは民俗語の傾向から、ひとまず「とおし」=農具、「ふるい」=食物用と定義し、粉類をふるう用具は「ふるい」として食項目に入れた。	モミドウシ、トシ			アワフル、トオシ、コイ、ムギブ、ルイ	ゴメドオシ	シ、コメドオシ、オシ、ココメドオシ、カネドオシ	トオシ、ナ、タネオシ	トオシ、ユ、アラユイ、ユイ	【目の粗いふるい】あらかんど・あらかしびとーし・ちゃぶれ・ちゃぶれー・やっこーし 以上、【標準語引き方言辞典】(佐藤亮一) 【目の粗い篩】さどーし・もみおろ 以上、【標準語引分類方言辞典】(東條操編)	
千石通しと 万石通し	『和漢三才図会』の「千斛籠(せんごくどおし)」は長らく農具と勘違いされてきたが、搗いた後の米と糠とを分けると書かれていて、これは台所用具であった。ここでは白米と糠とを分ける千石通しは台所用具なので農具から外し、玄米と糠を選別する農具を万石通しと呼び分けることにした。										
 まんごくどおし  万石通し	唐箕の一番口から出てきた玄米と摺れ残り糠を選り分ける道具で、漏斗に入ると傾斜網枠を流れる間に玄米は下に落ち、摺れ残り糠は網を流れて選別される。漏斗・傾斜網枠に網枠の角度を変えられる可動脚をつけた可動脚型と、傾斜網枠を固定して玄米の出口をつけた固定脚型がある。	センゴク、マンゴク	タテセン			センゴク	センゴクド、オシ、マン、オシ、カネド、ウシ	センゴクド、x			
 べいせんき 米選機	玄米に混じった屑米を選別するもので、形は万石通しだが金網ではなく細い鋼線を並べていて、玄米は線面上を滑り、屑米は隙間から落ちる。鋼線は2層になっていて、重なり具合で間隔を調整できる発明品。昭和の初期から40年代ごろまで使われた。							ベイセンキ			
 ゆりわ 汰輪	半切り桶大の曲物で、稷摺り後の玄米と穀殻・糠を入れて揺すって軽いものは上に集まる比重選別の原理で選り分けるもの。万石通しや大型の汰板の出現でほとんど見られなくなった。	センテイ									
 ゆりいた 汰板	万石通しに掛けてもなお玄米には糠や小粒が混じるのでそれを精選する比重選別器で、幅50cm長さ1mほどの前後に長い浅い木箱で、手前の側板の両端は左右に突き出て把手となり、先幅はやや細まっていて、底板には斜め網状の目が刻まれている。天井から吊して前後に揺すって使う。万石通しと併用して広く使われた。	センテイ							イタユリ		
 とます 斗枘	1斗用の枘で、俵は4斗が標準だったので、玄米を俵に詰める時に容量の確認に斗枘を使った。2本の把手の突き出た四角い枘が元の形だが、桶構造の円形の枘も使われた。				トマス		トマス	イットマス			
 とかき 斗掻き	枘に穀物を山盛りに入れ、棒で縁を擦って余分な穀物を払い正確な容量を量るための棒。斗枘でよく使ったので「斗掻き」と呼ぶ。	トカキボウ			トボウ	トカキ	マスカキ	トカキ	トカチ		
 もみじょうご 籾漏斗	穀物を俵や吠に詰める時に使う大型の漏斗。細竹で口縁部を大きく下部を細く筒状に編んでいる。大阪ではクライヌケ(喰らい抜け)。							モンジョゴ		【穀物を俵などに入れる時に用いる大形の漏斗】とのくち・こくぐち 以上、【標準語引分類方言辞典】(東條操編)	
 たわらしめき 俵締め機	鋼鉄製の湾曲した雁木とワイヤーを組み合わせたもので、輪になった部分に俵を通し、レバー操作で俵を締めおいて縄で縛れば容易にきつく縛れる。俵締め機を外してまたセットしながら順次縛って仕上げる。						コメグワラ、シメ	タワラジメ			
精米											
搗臼・摺臼・ 挽臼	臼と呼ばれるものには、①杵で搗く精白や餅搗きの「搗臼」、②籾から穀殻を外して玄米を取り出す「摺臼」、③麦や大豆を粉にする「挽臼」がある。①は堅杵や横杵で搗くものと、足踏み式の踏臼(碓、からうす)があり、②には木製往復回転の木摺臼と、粘土に木歯を埋め込んだ土摺臼があり、③には麦や大豆を挽く石臼と、抹茶を挽く茶臼がある。搗臼は弥生時代に稲作民が持ち込んだもの。摺臼は古墳時代に朝鮮系渡来人が持ち込んだもの。挽臼は鎌倉時代に禅宗寺院の厨房に素麺・饅頭・饅頭など粉食文化とともに持ち込まれ、その後民間に広まったもので、伝来時期と系譜が異なる。										
 こめつきうす 米搗臼	輪切りにした大木を削りぬいた搗き臼のうち、精白専用の臼で、直径は大きく高さは低目で、縁が内湾して米が飛び出さず循環するように作られている。搗くときは薬束を忠にした輪を米の上に置き、輪の中を搗いて米の飛散を防ぎ循環をよくした。	クボウス、ウ、コツキウス			ウス	カチウス	コメツキウス	ウシウス		【臼】きうす・くぼ・ちゃんから・てうす以上、【標準語引き方言辞典】(佐藤亮一) 【臼】うすくぼ・くぼ 以上、【標準語引分類方言辞典】(東條操編)	
 たてぎね 堅杵	1mほどの丸棒の中段を握って上下して搗く杵で、握りの部分が細くくびれている。弥生時代に稲作とともに持ち込まれた古いタイプの杵で、鬼の餅つきのイメージのほか、伝統行事では堅杵が多く使われている。	テキネ	キネ、ゼンボンキネ			テギネ		テギネ、タ、アジン		【棒ぎね】たてぎね 【柄がなく中央のくびれた部分を手で握ってつくぎね】きぎ・せんぼんぎね・ていあどうむ・てきぎ・てきね・てきね・てきぎ・てきぎ・てまきね 以上、【標準語引き方言辞典】(佐藤亮一)	
 よごぎね 横杵	杵部と柄がL字形につけられた杵で、中世に中国から伝来し、江戸時代を通じて堅杵に置き換わっていき、今日では餅つきには横杵が使われている。	ヨゴギネ	キネ	キネ	キネ		キネ	キネ、ヤマ、カキジチ、トアジン			
 こめつきぎね 米搗杵	餅つき杵より重い杵で、杵の直径20cmほどで重さは10kg前後。柄はやや鈍角につけられているものもある。米糠を取るのが目的なので、底面積を大きくして当たりを柔らかくし、粉米がでないようになっている。また柄を鈍角につけるのも振り下ろしたときに杵の底面が米に水平に当たるようにした工夫である。	ヨコツキギネ									
 ふみうす 踏臼	シーソー板の中ほどに軸を通して支点で支え、先に杵がついていて、反対側の端を足で踏んで米を搗く臼。古代に中国から伝来しカラウス(碓)と呼ばれてきた。関東地方では江戸時代に伝わった土摺臼を唐臼(カラウス)と呼んだため、名称の混乱を招いている。ここでは「物類称呼」(1707)の用例を採って「踏臼」とした。					カラウス	カラウス、コメツキウス	フミウス	x	【足踏み臼・碓】しがら・しがらうす・ふみうす・やくら・よこうす 以上、【標準語引分類方言辞典】(東條操編)	

名称	説明	只見	奥三面	羽村	沼津	徳山	滋賀	鹿児島	沖縄	さまざまな呼称	備考
 みずからうす 水碓	踏臼の人が踏む部分を水のたまる槽とし、流れの水を笕で槽に注ぐと重さで下がり、水が流れ出ると軽くなって跳ね上がり、反対側の杵が米を搗くしくみ。パツタリとも呼んだ。	パツタリ					ミスガラウス	サコンタロ	×		【水流を利用した米搗装置・そうす】うさぎつずみ・こと・さこんたろー・しかつずみ・そーずがらうす・ちよーずがらうす・ちよーたろー・つずみ・はしき・ぱつたり・ぼつとり・みずなるこ 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）
 すいしゃ 水車	流れの強い川に大型の水車を設置し、水車小屋内でその回転力を歯車でいくつもの突起のついた心棒に伝え、心棒の突起が堅柱の突起を押し上げては外れ、押し上げては外れることで、何本も並んだ堅柱で米を搗く。また歯車で回転力を石臼に伝え、小麦の製粉をした。						スイシャ	スイシャ、ミスグルマ	×		
薬製品・薬細工											
 むしろ 筵	筵は一般に薬を編んだ敷物と説明されるが編物ではなく織物で、筵機（むしろばた）に40本ほどの細縄を経糸としてセットし、横糸にあたる薬を左右に押し込んで箆で打ち込んで織る。筵は長さ6尺（180cm）幅3尺（90cm）が標準で、親などを天日で干すときの敷物などに広く使われた。	ムシロ			ムシロ、ミシロ	ムシロ、ミシロ	ムシロ	ムシト、ムシロ	ムシルシロ		【筵】いなばき・いなばきみしろ・いなばきみしろ・いなまき・いのほきみしろ・いまなく・うらむしろ・かわむしろ・このほね・すと・むっしょ 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一）
 ねこむしろ 猫筵	経糸としての細縄に薬束を前後から絡めて撚りあわせて編みつけていく「ネコ編み」で編んだ厚手の筵。クッション性があり、長さ290cm、幅163cm、厚さ3cmで殺物乾燥用などに使われる。また凹凸があるので鉱山での金銀などの選別に小型のねこむしろが使われた。ネコダ・ニクアクとも。							ニクブ			
 たわら 俵	米の保管・輸送に使われた薬製の円筒形容器で、容量は地域によって違ったが昭和に入って4斗が標準となった。俵は2重構造で、薬で編んだ藁を筒状にして胴体とし、底と蓋に棧俵をつけ、玄米を詰めて棧俵が外れないよう周りから細縄で籠目のようにかがってとめ、胴体の5カ所を縄で縛って仕上げた。	タワラ			タワラ、タラ	タワラ	タワラ	タワラ、トウラ	タラウラ		【俵】かまぎ・すご・どひゆー・どひよーか 【米俵】いのこたわら 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一）
 さんだわら 棧俵	薬で編んだ円形の蓋で、俵の底と蓋に使う。	サンダワラ			サンダワラ、サンダワラ	サンダワラ、サンダワラ	サンダワラ				【俵の両口に当てる、わら製のふた】さばいし、さばやし、さんざらばし、さんざらばせ、さんだべーし、さんだらば、さんだらばし、さんだらばせ、さんだらばち、さんだらべし、さんだらべしー、さんだらばし、さんだらぼちち、さんだらんぼち、さんだるぼちち、さんばーし、さんばあて、さんばいし、さんばし、さんばち、さんばやし、さんばやし、さんびやーし、さんびやし、さんぶし、さんべーし、さんべーし、さんべし、さんべしー、さんぼし、たーらつばし、たーらつべし、たーらつべしー、たーらつべしー、たーらんべし、たーらんべしー、たーらつべし、たーらばし、たーらばす、たーらべし、たーらぼちち、たわらすぼ、たわらつべし、たわらばいし、たわらばし、たわらべし、たわらべしー、たわらぼちち、たわらんば、たわらんばし、たわらんばせ 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【俵蓋（さんだわら）】えんざ・きよーつばし、さばいし、さんだらぼちち、さんどーじ、さんばいし、さんばし、さんばち、さんばやし、さんぶし、さんぶた、さんべーし、さんぼし、せんだ、たわらばし、ちよーつべし、ばせ、はやし、きよつばし、さんた、ぼちち 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）
 かます 俵	薬筵を二つ折りにして左右を薬縄で縫い綴じた袋状の容器で、幅も深さも90cm弱。米麦・雑穀・芋類・肥料・塩・鉱石などの輸送用の包装として広く使われた。	カマス	カマス		カマス	カマス	カマス	カマゲ、コッパレカマス	カマジー		【俵】かちぶき・かまき・かまき・かまぐ・かまげ、くぐつ、けどし、こえくぶき、すみだつ、そーしんふくん、たつ、だつ、ひぐつ、ひげご、ひげなし、ふすま、まきがり、まついれ、まっかり、まっがり、めつき、めつけ、よつくぶき 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【俵】えなまき、かちぶき、かまき、かまげ、くぐつ、くぶき、だつ、めつけ 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）
 わらすぐり 薬選り	薬細工には、薬の株元のはかま（下薬）を除去する必要があった。千歯扱きの歯を開引いたものが多い。	ワラスグ			ワラスグ	ワラスグ	ワラスグ	ワラスグ	ワラスグ		
 わらうち 薬打ち	薬細工のために薬を打って柔らかくする横槌で、ケヤキなどの丸太を短く切った柄を削り残している。直径15cm前後、全高25cm前後。土間に据えた薬打石にわらすぐりをした薬束を置き、上下を返して何度も打って柔らかくした。	ヨコツチ			テツチ、ツチ		コツチ、ヨコツチ	ワラウコ	コ		
 わらうちき 薬打機	大きな円形ハンドルに上下に接した2本の鉄製ローラーを連動させ、ハンドルを回して薬をローラーの隙間に噛ませ、隙間をくぐらせて薬を柔らかくさせる機械。ローラーは軸方向の断面が波打っており、上下がしっかり噛み合せて薬を柔らかくする。							ワラウチキ			
 なわないき 縄綯い機	足踏みで機械を回転させ、2本の供給口に薬を入れると撚りが掛かって縄に纏われてロールに巻き取られるしくみ。全国で広く使われた。				ナワナイキ		ナワナイキ	ナワナイ			
 たわらあみ 俵編み	俵や藁を編む道具で、股木を二つ割りにして逆さにした左右の脚に薄板の桁を渡し、等間隔に刻みを入れ、ツチノコに巻いた細縄を2本ずつ掛け、薬を横たえてはツチノコを前後に振りわけながら編む。コモゲタ（藁桁）、富山県ではアマダボウ。	コモアミ			タワラアミ	ダイ	タワラアミ	コモガキ	ダイ、コモアミ		【俵を編む道具】うま 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）

名称	説明	只見	奥三面	羽村	沼津	徳山	滋賀	鹿児島	沖縄	さまざまな呼称	備考
 むしろばた 筵機	筵を織る道具で構造的には織機。高さ、幅ともに150cmほどの四角枠に経糸にあたる40数本の細縄を筵を通して上下に張り、横糸にあたる薬を通して、筵を打ち込んで織った。	ムシロオリ			ミシロバタ		ムシロバタ、ムシロバタ、ムシロオリ	ムシロバタ、ハタムシ		【筵を織る機】はたこ 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一）	
 あしぶみきむしろばた 足踏み式筵機	筵機の横に足踏み機構を追加し、筵の動きと横縄を押し込むサシ（差し）の動きを連動させたもの。効率が良く、筵の商品生産に活躍した。						ムシロオリ	キ			
その他の収穫・加工用具											
 たけのこほり 筩掘り	長さ80~120cmの長い細身の鉄先に柄をつけたもので、筩を見つけると周りの土を少し掘り、地下茎から生えた位置の見当をつけ、柄を向こうに倒した状態で鉄先を打ち込んで根元を切り、柄を事前に引いて筩の原理で起こす。このタイプは関西でよく使われるが、他に刃の長い唐鋸が使われることも多い。						タケノコホリ				
 ちゃつみかご 茶摘籠	茶の木の間に置いて茶葉を摘み入れる籠で運搬用も兼ねる。腰にさげる小型の籠を使うこともある。				ショイカゴ、タテ		オオカゴ	チャカゴ、チャツミカゴ、チャツミテゴ	x	【茶摘みかご】ちゃつみぼーら、ちゃつんぼーら、ちゃまき・ぼぼら 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一）	
 ちゃせいろ 茶蒸籠	茶葉を蒸すための道具。円形の曲物製で、底には粗い通しのような網が張られており、湯釜の上に蒸気穴のついた台板を載せて蒸籠を重ね、蒸籠の網目の上に茶葉を載せて蒸す。			コシキ				チャペロ	x		
 ほいろ 焙炉	蒸した茶葉を火の熱を加えて揉むための装置で、口のあいた長方形で腰の高さの炉の本体に鉄棧を渡し、助炭と呼ぶブリキ製の和紙を貼った浅槽をはめ込む。口径は180×90cmほどで、蒸した茶葉を筵に広げてさまし、助炭に入れて手で揉んで加工した。			ホイロ	ホイロ		ロウバコ、ホイロ		x		
 ちゃみ 茶箕	竹製の箕に和紙を貼った製茶専用の箕で、焙炉で揉んだ茶を箕で掃って悪い葉やゴミを取り除く。						ミ	パラミ			
 ちゃぶるい 茶篩	乾燥させた荒茶の大きさを振りわけ、出荷に向けて大きさを揃えるのに用いる篩。底が方形の竹製の平織り網で、周りは円形でご目目に編み上げている。口径60cm前後。			チャブルイ			チャトオン	トオン			
 ちゃつぽ 茶壺	茶を貯蔵・運搬するための壺で、口が大きく胴体が膨らんでいて、表面には反故の和紙を貼って湿気を防いでいる。中世では中国陶器が用いられたが、近世には信楽焼・丹波立杭焼・備前焼など西日本の陶器が使われた。						チャツボ	チャツボ		【茶壺】ちゃぐり・ちゃぼち・じじり 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）	
 ちゃばこ 茶箱	茶を貯蔵・運搬するための木箱で、板の継ぎ目には目張りをして湿気を防ぎ、全体に反故の和紙を貼ったものもある。江戸時代に茶の流通が拡大したのにもなって茶壺より運搬に便利な茶箱が出現した。						チャピツ	チャバコ			